

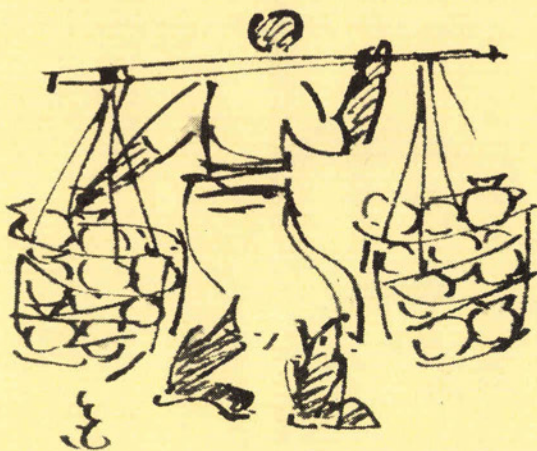
昭和51年5月9日第三種郵便物認可（毎月1回1日発行）昭和52年5月1日発行 通巻66号 ISSN0385-5457

# ヒマラヤ

**HIMALAYA**

1977年**5**月号

＝パキスタン特集＝



日本ヒマラヤ協会——HAJ

HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN



# HAJ・ヒマラヤ集会

HAJヒマラヤ調査隊・ツアー

(7月～8月)

中部地区定例集会 18時30～20時 無料または実費  
 <山行>パミール隊・サセル偵察隊と合同で富士

登山をおこないます。初心者も歓迎。

期間・4月29日～5月3日 吉田口5合目佐藤  
 小屋をベースにします。詳細は名古屋事  
 務所へ至急お問合せ下さい。

<名古屋集会>ホテル・ニューナゴヤ747号  
 5月27日(金) エア・インディア名古屋営業所  
 (名古屋駅前 毎日ビル7階)

テーマ★ラダックとザスカルの山旅

<岐阜集会>岐阜南市民会館・岐阜市加納丸ノ内  
 7月8日(金) 名鉄、国鉄「岐阜」駅より20分。

テーマ★カシミールの山と街(スライドと話)  
 なお、8日夜から10日北アルプス登山の予定。

下記の日程や費用は52年4月1日を基準として  
 おり、航空機、現地の都合で予告なく変更するこ  
 とがあります。詳しい日程表などがありますので  
 ご請求下さい。

◇ 8月4日発19日間

カシミール・ラダック自由トレッキング  
 234 (円) (添乗員なし)

世界の屋根を行く 450 (円) (添乗員あり)

◇ 8月7日発14日間 372 (円) ( " )

8月7日発9日間 329 (円) ( " )

東洋のスイス・カシミール・パカンス旅行

## HAJ・ビスタリクラブ例会

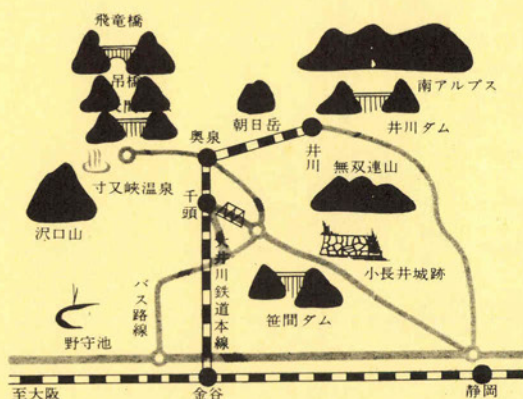
<期日> 6月4日(土) 5日(日) 1泊2日 <費用> 4,500円(小人3,000円)当日、受付で。

<場所> 寸又峡ー南アルプス表登山口。沢口山(4時間)登山、飛竜橋などへのハイキング。

<申込> ハガキでビスタリー・クラブ黒沢文代

<宿泊所> 寸又ヒュッテ

バスの終点「寸又峡温泉」で下車。坂道を下って温泉入口へもどった左側。道路をはさんで右側に無料駐車場あり。(雨天の場合は、ヒマラヤの話やスライドなどを楽しまします。)



### 交通ご案内

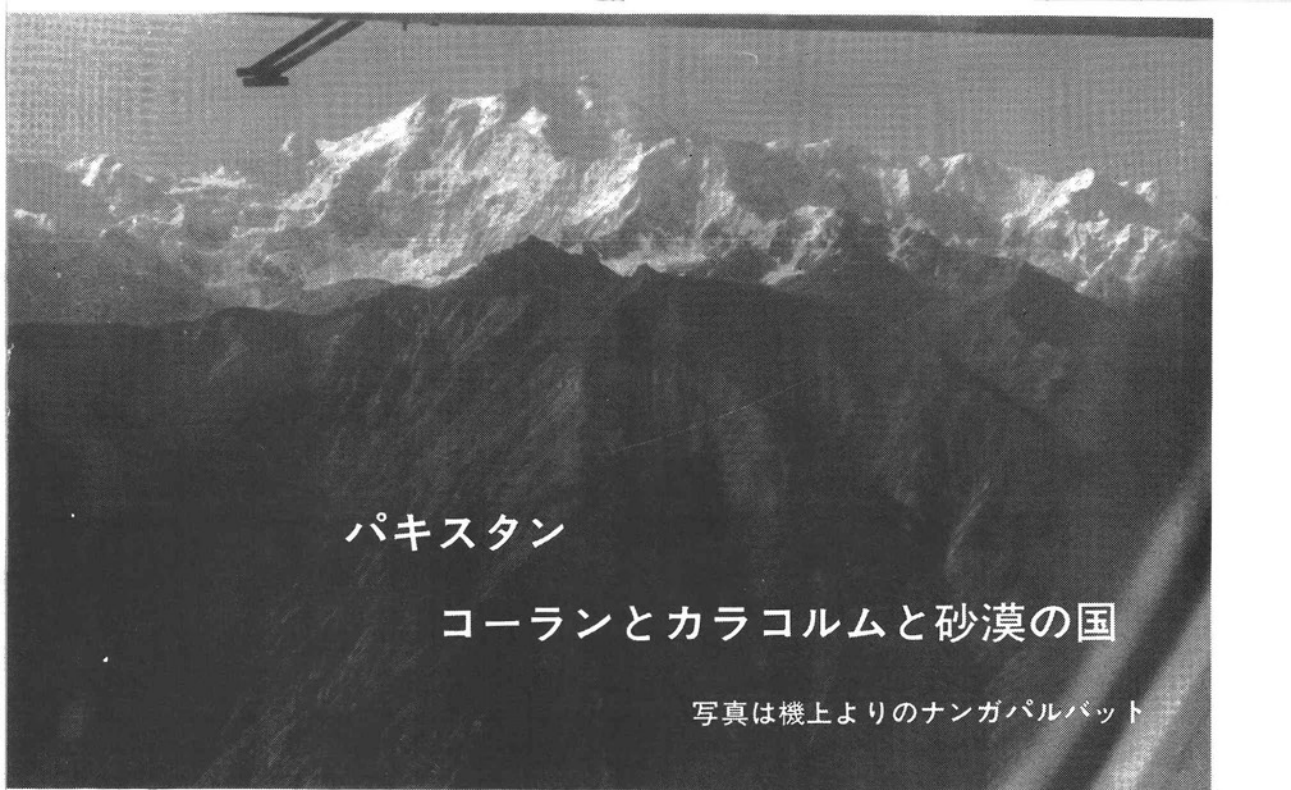
東海道線金谷駅で下車し、電車・ジーゼルカー・バスと乗次いで変化に富んだ大井川の車窓風景が楽しめます。寸又峡温泉ゆきバスが免沢峠を越えるころから眼下に数十米の断崖を望みスリルが強すぎますが安全運転で心配はありません。

電車 ジーゼルカー バス  
 ●金谷 千頭 奥泉  
 1時間 バス直通1時間

寸又峡温泉  
 ●ドライブには静岡から清沢、洗沢峠を越えるコースがあり、2時間で到着します。

## ◇◇◇◇◇ 「ヒマラヤ」5月号目次・パキスタン特集 ◇◇◇◇◇

|                            |    |                            |    |
|----------------------------|----|----------------------------|----|
| コーランとカラコルムと砂漠の国パキスタン.....  | 1  | シンギ・カンリ周辺の氷河と峠.....        | 12 |
| ブリアンサール(6,293m) 1975年..... | 1  | * パキスタンの旅について.....         | 16 |
| <ヒマラヤ紀行>カラコルムの山旅(5).....   | 3  | * アフガニスタンの旅について.....       | 17 |
| パキスタンを知るための本10冊.....       | 9  | * <ヒマラヤ閑話・12>.....         |    |
| K-7 試登.....                | 10 | * イタリア隊によるカラコルム遠征文献.....   | 19 |
| <関係機関・団体——その6>.....        |    | * 第7回東日本ヒマラヤ研究会開催要項.....   | 20 |
| 日本ヒンズー・クシュ・カラコルム会議.....    | 11 | 「予告」講演と映画の会「ヒマラヤの彼方へ」..... | 22 |



## パキスタン

### コーランとカラコルムと砂漠の国

写真は機上よりのナンガパルバット

カラチの夏は暑い。焼けるように暑い。

パキスタンは 5,000 年の歴史を持っているが、同時に新しい国でもある。独立したのは 1947 年で、パキスタン国の地方の名であった、パンジャブ、アフガニスタン、カシミール、インドのそれぞれの頭文字をとり、それに国土を意味する“スタン”をつけて“PAKISTAN”としたといわれている。“パキスタン”はウルドゥ語で“清浄な国”を意味している。

カラチの暑さを逃れて北へ飛ぶとカラコルムがはてしない砂漠の彼方にそそり立っている。

そして、人々は回教を信じている。「唯一至上無始無終の神」アラーなしでは夜も明けぬ国である。

HAI も 1978 年のパキスタンのヒスパー・ムズタグ地域の未登峰、ユクシン・ガルダン・サール（約 7,775m）への計画が動きはじめたので、今号の「ヒマラヤ」はパキスタンへスポットをあててみた。

#### ブリアンサール (6,293m) 1975 年

\*\*\*\*\* 内田 嘉 弘

ブリアンサールは原地語で「天使のいるオトギの国」という意味である。この山へは 1956 年に京大探検部が西面のパドスワート氷河より 5,000 m まで試登している。1970 年にはポーランド隊が南面のカレンジ氷河が荒れていたため頂へは達しなかった。その他にドイツ隊が入山したようであるが、どこから入ったかは不明である。なお京大隊の記録は「スワート・ヒンズークシ紀行」、「憧憬のヒマラヤ」に載っている。

※

北京経由でラワルピンディに入り、ギルギットに着いたのは 1975 年 7 月 17 日であった。ギルギットからはジープでイミットまで入る予定であったが、橋が壊れていたのでチャトルカンまでしか行けず。ここからキャラバンとなる。そのために

2 日のキャラバン予定が 3 日に延びてしまい、B.C には 7 月 22 日に着いた。ここは 1956 年の京大隊と同じ場所であった。

23 日より登山活動に入る。第 2 氷河とパドスワート氷河の偵察に入ったが、第 2 氷河はルートとしては思わしくなく、パドスワート氷河沿いにルートをとった。19 年前の京大隊は B.C よりパドスワートの森を抜けて第 2 氷河の末端へコースを取っていたが、当時より地形が変わり（1974 年の西カラコルムの地震でか）、そのコースは無理で、一度 B.C から氷河へ下り、氷河の中に登路を求めねばならなかった。また、B.C から C<sub>1</sub>へは約 1,000 m の標高差があるため、どうしても途中に中継点、仮 C<sub>1</sub>を設け、C<sub>1</sub>への荷上げは仮 C<sub>1</sub>へ集結してからであった。仮 C<sub>1</sub>はパドスワート氷河の左岸の樅木



帯に設けた。 $C_1$ へはニセ・パドスワート山から出ている支尾根の下をトラバース気味にルートをとる。このルートは落石の危険のある3本の沢を越さねばならないので、できるだけ早朝に通過するようにした。 $C_1$ 直下は岩場と雪壁とがある。岩場は特に困難ではないが雪壁は約150mほどフィックスを張り、 $C_1$ (4,700m)を27日に建設した。 $C_1$ はニセ・パドスワート山の下のテラスの手前である。

ここで19年前の京大隊のダンボールの破片をみつける。 $C_2$ へはニセ・パドスワート山のテラスに一坦抜け、ここから氷河の押し出しの直下を横断してプラトーへ抜けようとしたが、氷河の活動がはげしいのと、午後は雪崩の危険がある所で、 $C_2$ 建設へも、仮 $C_2$ (5,020m)を設けて、ジリジリとルート工作、荷上げを繰り返しながら前進した。この山は、B.C、 $C_1$ 、仮 $C_2$ からも姿が見えずプラトーまで出ないことには、姿が眺められないことは判ってはいたが、山頂のルートを自分達のみで追えないのは非常に不安であった。入山してから13日目の8月4日に大プラトーに抜け出た時、はじめてブリアンサールを眺めた。頂度、鷹か鷲が羽根を拡げているような形をしており、雄大な姿であった。この時、私は「この山はもらった!!」と

心の中で叫んだ。プラトーを突き進み北西稜に取り付けば、あと3〜4日の内に頂上は間違いないと確信した。また、地図上の?のマークが何を意味するか、多分プラトーということ想像はしていたが、これほど大きいとは思わなかった。むしろ大雪原と表現する方がピッタリであった。8月5日に、この雪原の真ん中に $C_2$ (5,400m)を建設した。ここからは、コズ・サールと無名峰の6,628mの岩峰、またその奥にコー・イ・チャインタールが望まれた。翌6日、7名全員で大雪原の内院へ、平坦な雪原を約3時間ばかり行ったところで北西稜に取り付き、この稜線のコルの右寄りの拳の形をした岩の左直下の雪壁を登り、岩蔭に $C_3$ (5,600m)を建設した。

4名を第1次アタック隊として残し、残り3名は $C_2$ に戻った。7日、心配していた天候も絶好のアタック日和となり、4名は $C_3$ を5時20分に出発、北西稜を忠実に辿る。雪庇が左側に張り出しているために右側を登ることとなる。コルから少し上は岩塔群があり、その間を稜線沿いに抜ける。その後、約50m程の雪壁を登り、クレパスに注意しながら、11時にブリアンサール(6,293m)の頂上を踏むことに成功した。頂上は3〜4人が立てるぐらいの広さであった。北からカンビレ・ディオ



ギルギット周辺の山 左からP.19558、P.18949  
中央奥の山P.19310、P.19230(カールタール)

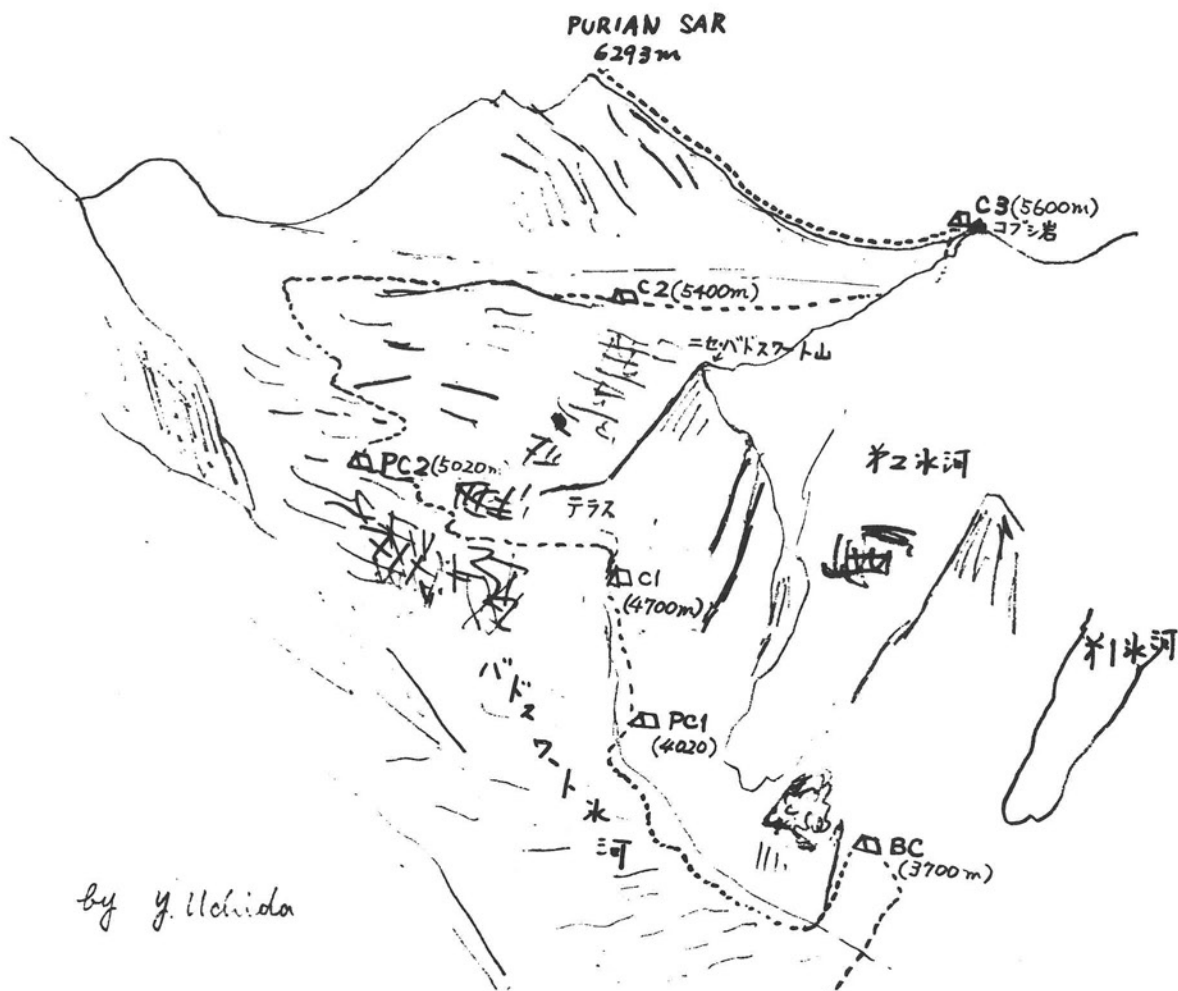


ール、パツーラ山群が眺められたが、東の方は雲が多くラカボシは雲が山頂をおおい、ハラモシュは完全に雲の中であった。8日、第2次アタック隊3名を頂上に立ち、これで当初予定していた登攀メンバー7名が全員登頂することができた。

コバニと白い山々の国にもう一度、山登りに来れる日を楽しみに……………ブリアンサールに別れを告げた。

◇ダージリンのHimalayan Mountaineering Journal (HMJ) 終身会員の登録について◇

ダージリンの国立ヒマラヤ登山学校の登山年報終身購読者のさそいが来ております。



—— 急告 —— ヒマラヤ登山学校 —— 参加者募集中 ——

日本山岳会主催・日本ヒマラヤ協会協賛で、この秋に第1回ヒマラヤ登山学校を開きます。遠征の実務と登山（ガルワル・東部・サルコット 6,099mの登頂など）を厳しく指導します。原真、沖允人、伊藤行人などがインストラクターとして参加します。期間、9月22日～10月15日（24日間）費用は一切を含んで54万円の予定。第2回は1978年夏を予定。

\*\*\*\*\* 河西俊郎

1974年6月から9月まで静岡登攀クラブのメンバーと一緒にピアフォ氷河にあるバインター・ブラックを目指したときの記録である。

7月10日

今朝も解雇問題でひと騒ぎ。慣れてきたとはいえ、うんざりする。いざ、やめさせられるとなるとあれこれよこせと言い出して、いつも若いリエゾンに大声を出させる結果となり、ひとりの若者のために、デュッソーのポーター全員が3ルビー削られる結果となってしまった。リエゾンは捻座でソプロンにコックとともに停滞。ポーター、チーフにいろいろ細々と指示していたが、我々にはウルド語が解からないので、キャラバン最後日の今日、賃金の支払いが心配であった。氷河の横断の後、高巻きをしてゆるやかな砂地から砂漠に出ると、カラコルムの山々が一望できた。

すでにバインター・ブラックのふところに入り込んだため、目的の山は尾根に邪魔されて見えなかったが、思わずため息がでた素晴らしい景観であった。つまり対岸の山々が巾広い氷河のために、何ひとつ視野を邪魔されずに眺められたのである。ベースキャンプ予定地のバインター（ポーターはベンタと呼んでいる）には夕方4時に着いた。早速チケット、荷物と引換えに賃金が支払われた。中には荷物を投げてよこす者もあって、下隊員が喝を入れた場面があった。とにかく、一通り金の支払が終わって荷物を見るとザックのポケットに入れた物が2、3無くなっている。すぐに召集をかけて聞いてみると、途中から帰ったデュッソーの連

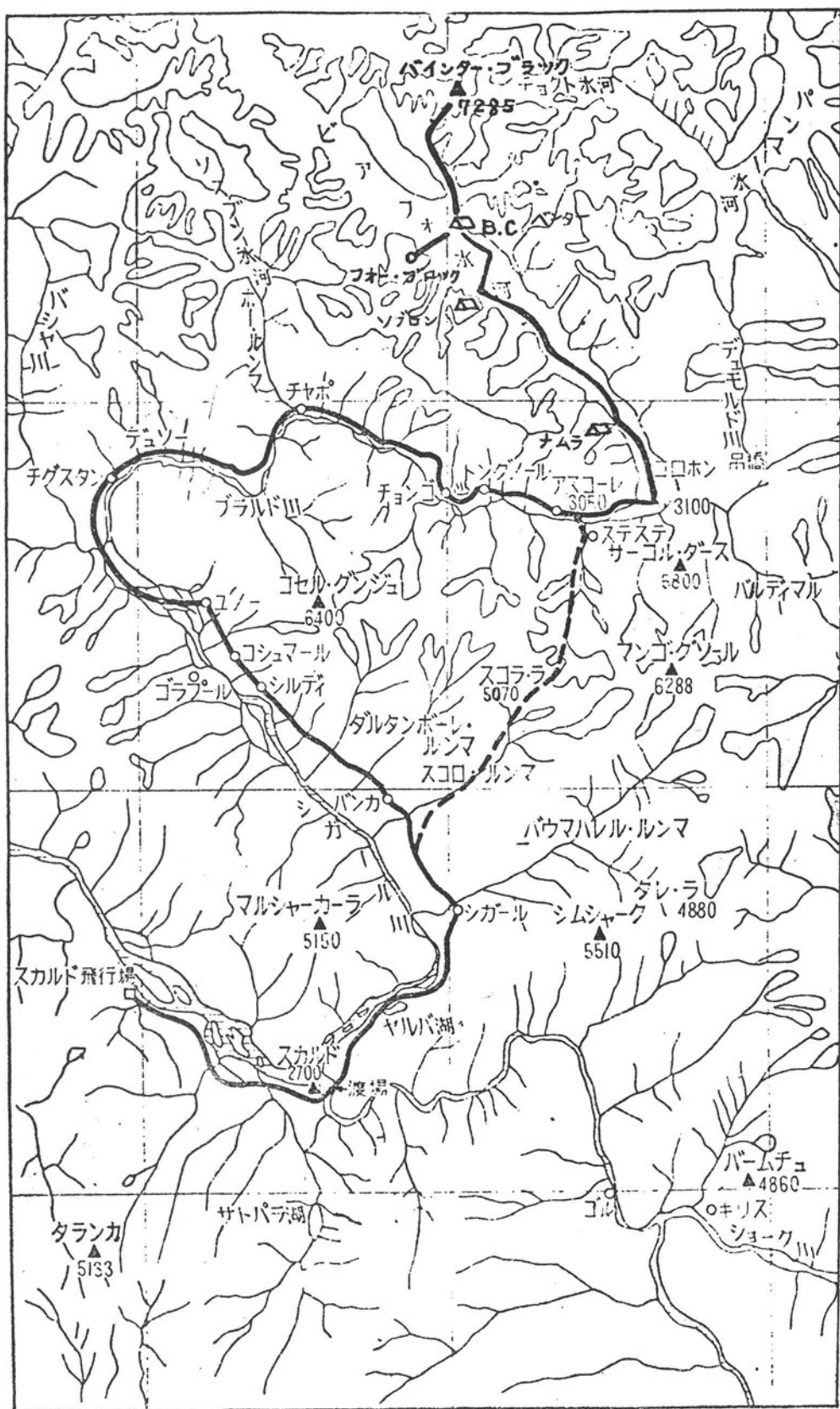
中だという。さあ、それではデュッソーの連中がおさまらない。結局とられ損ということになってしまった。いずれにしても、アスコーレのポーターはあまり良い印象を受けなかった。

特に、年をとった連中がよくないようであった。ちょっと目を離せば、ひもでもナイロン袋でもすぐ持っていってしまう。しかし、シガール谷に秘められた歴史をひも解いてみると、18世紀から19世紀半頃まで、たび重なる外部からの略奪によって、むしろ、よそ者を信ずることの方がおかしいのかもしれない。本来、勇猛なバルチスタンの故里シガール谷の、男達の面影をついに見出すことができなかった。しかし、中にはいいポーターもいた。デュッソーからきた若いポーターで、静かで協力的で、すでに顔付さえ、その人間性を表わしていた。名前を聞く時がなく、別れて手を振って行く彼を追ったが、夕陽と砂ぼこりの中を足速やに故里へ帰って行った。今日迄あるいた道のりを、彼は幾日で帰るのだろうか？ 帰りにデュッソーでまた是非逢いたいと思った。



アスコーレの村はずれの山々





夕陽が目の前の山の長い影をこのベースキャンプ地(B.C)におとす頃、一番ごねたイヤナ奴が帰って、やっと我々とポーターチーフ、サブだけになった。鳥の鳴き声と砂ぼこりの中で、幾日ぶりでポーターから開放された気分、皆グッタリしていた。すぐにテントを張った。今日は私の35才の誕生日であった。T隊員がB.C近くでカモをつかまえた。始めは隊の Mascot にするはずであったがとうてい飼うことは難かしく、またヤセてしまうくらいなら誕生祝いにということで料理することになった。皆、良心のとがめを私のせいにするのですくわれたのか、2人のポーターに料理をまかせて、カモ汁を作って祝ってくれた。B.C建設と誕生日の祝い。二重の喜びを分かち合ってくれるメンバー。カラコルムで迎えた35才のこの日を、僕はいつ迄も忘れないだろう。

#### バインターというところ

右手に草地のあるスロープと、その上部は崩れやすい岩山。平地は幅60mで、すぐ左手は氷河のモレーン地帯になっている。平地は砂地で、そこには雨期の水草と今の乾期には割合豊かな花と、麦の原種と思われる草ができています。また、遙かな対岸には無名の針峰群がずっと連なっている。このB.Cの唯一の欠点は水場迄、往復小1時間かかることと澄んだ水が飲めないこと。また、ひとたび風が吹けば、ミクロン級の砂が、情容赦なく、隙間の至るところへ入り込んでくることである。

7月12日

今日は隊長を残して後は全員で、ウズンブラック氷河の偵察に入った。2パーティに別れ、荷上げルートを見つけないことが目的であった。モレーン地帯はなかなかやっかいであったが、氷河の末端というものは皆こういうものであろう。一見して砂利のようであっても下は水でよく滑った。テーブルストーンも大きいものがあって、いつゆるんで滑り落ちてくるか解からないし、無気味であっ

た。氷河に入ってしばらくして軽い頭痛がした。多分、高度障害を受け始めているのだろう。呼吸も苦しいし、肺の底まで酸素が入った気がしない。ラトックI峰(7,146m)が正面に見える。ここから先は、一步一步が、この氷河に人間として初めて足跡を印すことになるのである。さらに登ると頭痛は前よりひどくなり、手元の高度計は4,400m。この地点へわずかばかり背負ってきた荷を置いて下ることになった。

7月15日

午前中偵察をかねてオーダーの丘へカメラを持って行く。オーガー(バインター・ブラックの別名)が雲一つなくよく見えた。双眼鏡で岩壁の状態を観察し、一応、ルートの選定をする。午後、双眼鏡の中にリエゾンの一行を見つけた。丁度、氷河を横断してくるところであった。全く偶然の発見に驚ろきながらも、まだ他に、誰かが氷河を歩いているのではないかと、あちこち見渡してみた。早速B.Cに帰る。5日ぶりの再会でコックのアリは涙顔であったし、リエゾンも僕を抱きしめた。何かと小やかましい気難かしやである彼だが、僕はそれでも何かと話をしたし、足の具合を見てやっていたので、特別の思いの現われであったのかも知れない。早速、足の具合を見る。ずっと歩いてきたというから、だいぶよくなってきているようであった。

夜になって、最初にリエゾンがやってきた。彼



ピアフォー氷河のモレーン、後方の山はテルクシュ

は淋しがり屋で、ときどき菓子を持ってはテントにやってきた。何しろ5日ぶりだから、何となくはにかみながら入ってくるようすは可愛らしい。久々に日本の歌をうたった。彼が帰ると、今度はコックとボーターがやってきた。早速、彼等にもうたってもらった。テープレコーダーが珍らしく、食べてしまいそうなくらいに口元へ持って行ってうたうので、再生してとても聞けたものではなかったが、何曲かをテープにとることができた。そのうちに、はにかみやのコックまでがうたい出し、あげくの果ては、テントの中で踊り出してしまった。メロディーは似かよったものであった。酒も入らぬのに、よく陽気にうたった。そして、最後にほうびを要求するあたりは、何か拍子ぬけしてしまったが、まあ大目に見ておこう。この土地では必ず代償が必要であった。今日も、リエゾンを連れてきたということで、ボクシス（ほうび）をくれといい出して、結局、チーフに靴を1足やることになった。

7月20日

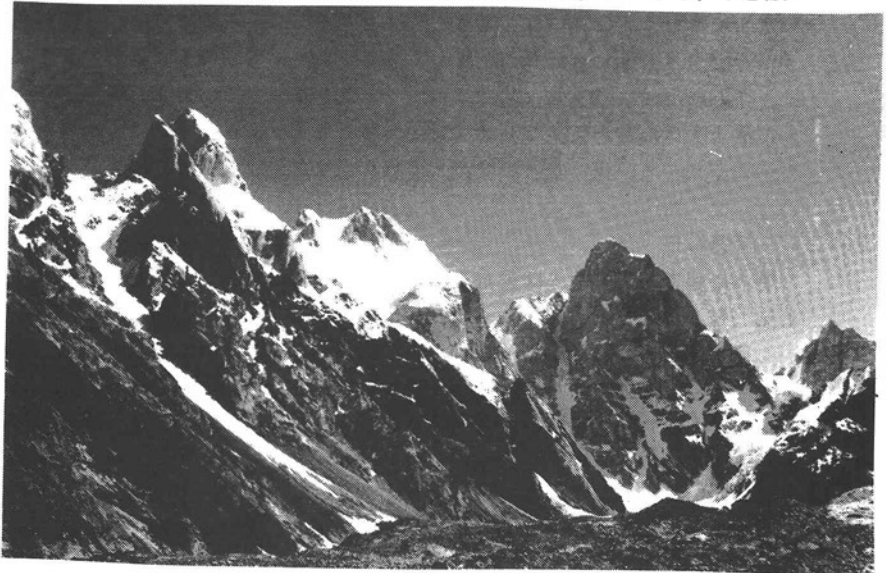
隊長が再び、ABCへ登って行って、B.Cは僕1人である。今日は1日中風が吹いていたので「カラコルム」の読書をしていた。今西先生のような知識はとても持ち合せていない。何か無学でくることがもったいないような気がするが、生きてきた程度で、それぞれを自分なりに感ずれば、それで良いのだ。単純は単純なりに、きっと良いところがあるのだから。B.Cへきて、珍しい蝶を随分見つけるが捕虫網もないし、ただ見ているだけなのだが、地面にとまると、パタリと横になる愉快的奴がいる。何とか一頭つかまえて持って帰りたいと思う。カメラに収めようと思うが、いざとなると飛立ってしまう。このペンターに見かけた蝶の最大級はアゲハ蝶、小さいのはシジミ蝶だが、きれいなルリ色をしていて、どこにでもいる。また、セセリ蝶を1

頭見つけたが、早くてよく観察できなかった。白い紋白に似た蝶もときどき見かける。異色は赤橙色のアカタテハ級の蝶で、遠くにいてもすぐに目につく。

最近、われわれの残飯をあさりに来るのか鳥が急に増えた。それが相当数、20羽から30羽の群れになっているのだ。そして、その中に巢立ち間近のヒナもよく見かける。動物では、日本では北海道にしかいないという“鳴きウサギ”を見つけた。ちょうど、子ネコをひとまわり小さくした位の大きさで、耳が丸く、僕のキジ場の近くで遊んでいた。今、午後7時。隊長は今日はABCへ泊りのようだ。

ローソクに灯を点して日記を書いている。8人用天幕に1人。特に孤独感はないが、変化のなかった日なのに、やたら長々と日記を書いている。ここのところ日没は、僕の気に入っている針峰へ沈んで行く。

ペンターの草地が静けさと夕闇に溶け込むのは、それからさらに1時間以上かかるのである。この平和な草地では、名も知らぬ黄色い花が、花びらをすっかり閉じて、わずかばかりの夕げのひととき。頭を静かに垂れる。虫とも鳥ともつかぬ鳴き声が聞こえて、4,000 mのB.Cは昼とは変わって冷えびえしてくる。コックがチャパティーを作っているのか、ペタペタとアタ（粉）を拡げている音が、ばかによく聞こえる。いまどき、不思議に



バインター・ルクパール氷河入口よりのラトック山群  
＜左よりⅡ、Ⅰ、Ⅲ峰＞

（JAC 東海支部）



リエゾンのラジオも鳴りをひそめている。彼は感心に夕暮れどき、どこかへ出かける。これはお祈りに行くのである。よそ者がいると恥かしいのか、とにかく、毎夕の日課となっている。そしてそのときだけ、ラジオは消されるのである。

この国では不思議なことに、このような祈りを捧げていても、人間は神の下に、皆平等などという訳でもない。例えば、彼の朝の洗顔のとき、コックのアリは彼のために、水または湯を用意して彼の横に立っている。彼は用意された水で歯をみがき、ゆすぎ、さらに、また新しい水で洗顔し、ハナをかみ、クシに水をつけて髪をとかす。コックはその間中、横でダンナに大声をあげられないよう細心の注意を払いながら、邪魔にならぬよう、また、トチらぬよう適当な間隔をとって立っているのである。何と忍耐強くも従順なのであろう。

こんなさまを眺めていると、何だかおかしな気分になってくる。生まれながらにして、そうした運命のかかわり合うところとなったのであろうか？ 若い24才のリエゾンと30才のコック、アリ。日本の近年にまで続いた封建時代を目の前に見ているようであった。二人ともまったく何も感ぜず、それが、あたり前のことであるのだろうか。

ラジオが突然大声をあげた。静寂はやぶられ、彼の長い夜が始まる。こちらはローソクが残り少なくなってしまった。まだ書くことはいっぱいあるのだが、灯を消すことにしよう。

氷河は確かに生きている。ときどき、ドドドドドと岩クズの崩れる音がこだましてくる。モレーンが日に溶けて不安定な岩石はバランスを失なって落下するのである。この音は日中あちこちで不定期に聞こえ、夜、氷河が凍るまで鳴り止まない。

7月21日

早々に起きて、6時には朝食を済ませ今日は、奮気一転して植物写真を撮るべくB.Cを出た。しかし花というものは、早朝からパッチリ開いているものは少なく、ほとんどが昨夜の眠りから覚めずにいる。したがって昨日、確かにこのあたりには豊富な花の群れがあったと思いつつ、あちこち見渡してみるのだが、不思議と目にとまらない。きっと、昨夜閉じた花びらを、まだ開花させないせいであろう。ひとつ、ゆっくり彼女等の目覚めを待つことにしよう。モレーンからはじき出され

て出来たような丘には、長い年月の間に風や雨が運んだ土が、今では植物の良い生息地となっている。丘の上にちょうど座りごこ地の良い岩がある。

ビアフォ氷河がずっと見渡せ、もちろん無名の雄大な山々も一望である。もう陽に溶けた氷河上の岩クズが、ガラゴロと雷のような音を立てて、奈落のような深いクレパスに落ちている。中には巨大な岩石もある。これ等はやがて、何百年か何千年かを経て、再び地上に顔を表わすであろう。今、僕の眺めている位置よりもっと下った、どこかのモレーンの上に乗っているかも知れない。そして、その危げな岩をよけながら、このカラコルムの山を目指すキャラバンが通って行くかも知れない。

このような自然の営みを思いながらいると、今ボツンと独りで岩の上にいる自分が、このカラコルムのどこかに吸い込まれてしまうんではなからうかと、思わず身ぶるいしてしまった。

今日の空は、秋を思わせるように青黒く高い。対岸から地鳴りのような音が聞こえてきた。すごい、まったくすごい。雪崩である。雪煙をあげて、ゆっくり落ちてくるのである。やがてその山が雪煙でかすむ頃、もとの静けさになった。対岸まで4kmへだてた場所でみたカラコルムの雪崩の爪後の幅や長さは、測り知れないものがあつた。

彼女等の目覚めを待つこと1時間半、ようやく目の覚めるような黄色や紫の花があちこちで見られるようになった。色の良い形の良い花をさがし求める。いわゆる“美人”をさがして歩くのである。さて、カメラをかまえると、そよ風はいたずら者である。彼女とたわむれていて、なかなか静止してくれない。ファインダーの中でにらめっこである。長いにらみ合いの末、ようやくシャッターを切る。登山中のそよ風は誠にありがたいのだが、こんな時のそよ風は、まったくのイタズラ坊主である。(つづく)

#### 住所・勤務先を変更された方へ一名簿準備中

HAJでは来年6月頃に新名簿を発行するよう準備中です。住所・勤務先、電話番号の変った方はHAJ名古屋事務所へお知らせ下さい。

新名簿は52年度(昭和52年4月1日～昭和53年、8月31日)会費を納入いただいた方にお送りいたします。

## ◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇ パキスタンを知るための本 10冊 ◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

\*\*\*\*\* 阿 部 淳

現在パキスタンの概説書に類するものは見当たらない。まず概観に接するとしたら大百科辞典（平凡社）か講談社版・世界の文化地理第3巻「インド・パキスタン・セイロン」あたりが近道であろう。パキスタンは英領インドの一部であった時代が長く、30年前に分離独立したに過ぎない。パキスタンの歴史を学ぶとしたらインド史を中心に探るしかないが、永年に亘る国境紛争やカシミールをめぐる攻防など両国の係り合いを要領よく解説してくれるのが「インド・パキスタン現代史」（蠟山芳郎著、岩波新書、1967年）である。そのうち東西パキスタンが分割された経過については「第三次インド・パキスタン戦争」（高橋貞雄著・日本放送出版協会、1973年）が放送記者の目でリアルに描き現在の印パの視点を明らかにしてくれる。近年の政治や歴史の変遷も尽きるところヒンズー教に対する宗教抗争とも言えるし、現在の生活を支配している社会倫理も宗教のそれである。インドをヒンズー教の知識なしに理解し難いように、パキスタン人やその生活を理解するためにはイスラム教の知識が必要である。しかしこの国が世界最大のイスラム教国でありながらパキスタン社会を前提として論じた書はなく主としてアラブを背景に語られる。それを我慢するなら「イスラーム」（蒲生礼一著、岩波新書、1958年）は手ごころな解説書である。

さて登山やツアーを前提に探検時代に目を向けるなら、その白眉は「カラコルムの夜明け」（コンウェイ著、あかね書房、1968年）であろう。未知の北面を探索するヤングハズバンドの「カラコルムを越えて」（白水社）やジャクスガム河の解明を描くシプトンの「地図の空白部」も探検の魅力を語ってくれるが、コンウェイの書はカラコルムの中央動脈と言える三大氷河を始めとする核心部の理解をも助けてくれる。探検から登山へ、K2征服までの全容を知るには「カラコルム登山史」（ダイネツリ著、あかね書房、1970年）が面白いだけでなく、カラコルム全域を概観するにも良い参考書となる。そしてより一步山岳に注目して地道に研究するには「カラコルム協議会報告」を欠かせることはできない。和訳は「吉沢一郎古

稀記念文集・カラコルム」（日本ヒンズークシュ・カラコルム会議編、茗溪堂、1973年）に掲載されている。これはカラコルム山脈の区分をベースに山座と名称の歴史的解説が施されており、1936年の論集とは言え依然として価値を失っていない。ツアーや登山に出かける人には「ネパール・パキスタン、ヒマラヤ・トレッキング」（実業之日本社、ブルーガイド海外版、1976年）が重宝であろう。地域概説、交通事情、自然と文化など最新情報やアドバイスがコンパクトに集約されている。

つぎが登山であるがカラコルムを知るという目的で眺めると「ガッシャーブルム4」（マライーニ著、理論社、1962年）は山岳の宝庫バルトロの氷河や山々を繊細な眼と写真を通して美しく再現してくれる。東奥へのもう一つの接近路であるスカルド〜ショーク川〜シェンチェン氷河を辿った登山記「サルトロ・カンリ」（京大学士山岳会著、朝日新聞社、1976年）があるが、入手が難しいなら「K12峰遠征記」（岩坪五郎編、中央公論社、1976年）に代えてもよい。最近のパキスタンの村や人を知るうえでも参考になろう。さて残る一冊は「？」——貴方の意に任せてお選びいただきたい。魔の山への果敢な挑戦の記録「ナンガ・パールバート登攀史」（パウアー著、あかね書房、1969年）、生き残るための凄惨な死闘を描いたハラモン遭難記録「最後の青い山」（パーカー著、二玄社、1961年）、パキスタン北辺境チトラルの紀行「異教徒と氷河」（ジョンパーグ著、白水社、1976年）、日本人初のカラコルム登山報告「チョゴリザ」（京大学士山岳会著、朝日新聞社、1959年）、カラコルムに科学的アプローチを試みた登山学術報告「キンヤン・キッシュ」（東大カラコルム遠征隊著、茗溪堂、1968年）などいずれも価値ある書で興味は尽きない。

なお、最近の登山手続などに関するものとしては「ブリアンサール」（京都カラコルムクラブ編、1976年）の巻末に付してある資料が有用である。HAJに若干在庫しています。（1,200円＋送料160円）「東海山岳第4号」の中の「ラトック遠征報告」も現地事情に詳しい。（2,500円＋200円）

# ◇◇◇◇◇◇◇◇ K-7 試 登 ◇◇◇◇◇◇◇◇

1976年・福岡GCC同人・カラコルム登山隊 成 末 洋 介

5月から6月にかけてラワルピンディは連日40度を越す暑い日が続く。地元の人達から皮肉まじりに“ジャパニーズ・クラブ”と呼ばれているミセス・デイビス・ホテルではフライト待ちの日本隊がイライラしながら無為の日を送っている。

わが隊は総勢6人の小パーティー。その構成は会社員3人、無職2人、学生1人。全員が山岳会を異にするという毛色の変った登山隊であった。金は勿論ない。いかに安くあげるか、考えたあぐくの知恵で、アナカン手続のため2人がカラチ經由空路で、4人がインド經由陸路で入。全員がホテルに揃ったのは5月30日だった。(この方法の損得はどちらも断じ難い。多少は安上がりだが苦労も多い)

ピンディでの登山手続きは思っていたほどのトラブルもなく10日間(リエゾン・オフィサーの到着が遅れたため若干手間取った)で終了、われわれもまた先輩連にならって“無為の日”の仲間入りをする。

6月18日、10日前のフライト待ちの末、パ軍の輸送機でスカルドに飛ぶ。東カラコルムの登山基地スカルドは灼熱のピンディとはうって違って高原の爽やかさであった。しかしバルティスタンの中心地にしては殺風景な潤いのない街だ。食糧とガソリン購入、ジープ手配のため2日間滞在。6月20日、4台のジープでカプルーに向う。(アタ、米、ガソリンは確実に手に入る。ジープの料金は1マイル=18~20Rs。1Rs=約30円)

カプルーはコンダスの山やシアチェン氷河周辺の山をめざす登山隊が文明の利器を使用できる最後の村。ショーク河に面した緑の多い気分のよい村だ。小さいながらバザールもある。登山隊あての郵便物はこの村の郵便局にデポされ、ポストラソナーを雇えばB.Cまで、恋人の便りも届く。

カプルー村でのポーター雇用風景はちょっとした見ものだ。遠くは歩いて3~4日もかかる山奥の村から、登山隊の到着を知ってポーター志願者がぞくぞくと集ってくる。その数3~4百人。めったにない現金収入のチャンスを掴もうと上へ下への大騒ぎが、雄大なカラコルムの山々、ショーク河の悠々の流れをバックに展開する。(ポーター

料金は食費含みで60Rs。料金交渉の余地はない)

6月22日、ショーク河をザークで渡りキャラバン開始。タリス~パレゴン~タガス~ブラコール~ラシット~コンダス谷~コンダス氷河舌端~コンダス氷河上~カベリ氷河B.C。悪名高いバルティ・ポーターを連れての10日間のキャラバンに輸送係はほとんど手を焼いていた。とくにネパールのキャラバンを知っている隊員はポーターの質の悪さをしきりに口にする。しかし、郷に入らば郷に従え。キャラバンの進行はリエゾンとヘッドポーターにまかせて、彼等のペースに従うのが最良。(キャラバンの1日行程は10~13km。わが隊は出発前にB.Cまでの日程を決め、それに従った。1日の行程は多少短かったが、ストライキもなく他の隊に比べて順調だったようだ)

7月4日、カベリ氷河右岸3,950mにベース・キャンプ設営。ベース・キャンプの背後にはリンクサールが3,000mの高差で聳えている。K-7は見えない。カベリ氷河からのK-7に関する記録が皆無であったため、めざす山の正確な位置すら分らない。2日間の偵察の結果、K-7はリンクサールから張り出している前衛峰の間にのぞいている鋭い三角形の岩峰であることが分った。その前衛峰群はカベリ氷河から1,500m~2,000mの岩と氷の壁となってそそり立っている。その間にわれわれがゴジラ氷河と名付けた1本のルンゼ状の小氷河がくい込んでいて、K-7へ達する唯



チャラクサ氷河からのK-7(中央やや左寄りの岩峰) 試登したのはその左にあるルンゼ



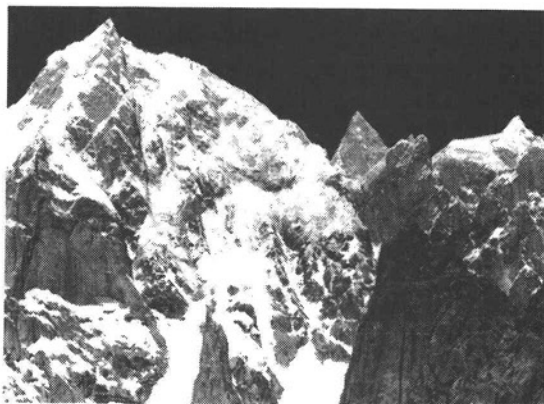
一のルートであろうと考えられたが、それは上部が500m余の岩と懸垂氷河で塞がっていて登攀が困難な上、アイスブロック崩壊による雪崩の危険が大きく断念せざるを得なかった。

カベリ氷河側には他にルートになるような弱点はなく、止むなく北面に活路を求めてカベリ氷河左岸に転進、7月7日C<sub>1</sub>、7月13日C<sub>2</sub>を建設した。しかし北面も相変わらず手の付けられない壁の連続であった。7月16日登頂を断念した。

その後、隊員2名を西面のチャラクサ氷河に派遣、K-7への可能性を探った。ベース・キャンプから4日かかりでチャラクサ氷河に達した2人は、K-7北の科尔にのびているルンゼ状の氷河を試登し、5,700mまで登った。科尔の高度はおよそ6,500m、その上は急峻な岩壁が頂上まで続いている。高度差2,000mにおよぶルンゼ内の登攀は常に落石とアイスブロック崩壊の恐れがあり、その対応策なしに取り付くことは危険だ。

シェルピカソリに初登頂した神戸大隊が撮った写真によると、K-7東面(カベリ側)直下には

「屋上雪原」ともいふべき大雪原が6,000mの高度に存在していることが分った。その雪原は四方を1,500~2,000mの岩壁ないしは氷壁に囲まれており、その唯一の出口が前記のゴジラ氷河であった。



カベリ氷河左岸4,500mからのK-7  
(中央やや右寄りに顔を出している三角形の岩峰)左の山はリンクサール

#### <関係の機関・団体——その6>

#### ◇◇◇◇◇◇◇◇ 日本ヒンズー・クシュ——カラコルム会議 ◇◇◇◇◇◇◇◇

パキスタン、アフガニスタンの山々、ヒンズー・クシュとカラコルムを中心に研究をし、また、これらの山々へ出かけた隊が集まり、「その活動を報告するとともに、相互に助言を与え、情報を交換」することを主旨として1970年に発足した。

毎年秋に開催されるH・K・T会議は昨年の愛知県蒲郡市で8回を数えた。全国からの出席者は100名余で、毎年、増加している。最新の情報が得られることと、この地域の第一人者である多くの講師の話やアドバイスが他では得られない知識を供給してくれることになる。それに加えて各地からの登山家が酒をくみかわし、議論するという親睦の機会でもある。

1977年に世界第2の高峰K<sub>2</sub>にむかう隊は形式的には日本山岳協会の隊であるが、実質的にはこのH・K・T会議が企画し、組織した隊である。

連絡のための「H・K・T News」は1977年1月にNo.22が発行された。年に約4回不定期に発行されるが、ホットなニュースはもちろん、多くの博識な執筆者による内容は豊富である。

また、H・K・T会議の報告は毎回きちんとまとめて出版され、内外に高く評価されている。第7

回のもので第7冊目である。

この会議で出版された大冊に「カラコルム——吉沢一郎古稀記念文集」(1973)がある。これは会議長の吉沢一郎氏を記念したもので、「カラコルムの課題/カラコルム協議会の報告/ライラー峰の山座同定/中部ヒンズー・クシュの植物層……」などなど重厚な論文で構成されている。茗溪堂で出版された。(3,400円)

この他に、カラコルム、ヒンズー・クシュの登山クロニクルの編集とその写真集の発行も計画されている。この会議でないとできないと思われる事業なので、1日も早く公刊されることを希っている。

入会の手続は下記の事務所へ3,000円同封して申し込めばよい。登録会員が会議へ参加する場合は1,000円安くなるサービスもある。

H・K・T会議については紹介したいことも多くあるが、HAJの会員の中でも何人かはこの会の登録会員になっている人も多いし、会議の様子は「岳人」や「岩と雪」で毎回報告されているので本稿はこのくらいで筆をおくことにしたい。(O)

## ◇◇◇◇◇◇◇◇ シンギ・カンリ周辺の氷河と峠 ◇◇◇◇◇◇◇◇

東北大学カラコルム遠征隊 古 谷 信 之

東北大学山岳部・山の会は 1976 年にカラコルム東部のシンギ・カンリ 7,200 m に輝かしい初登頂をはたした。佐藤春郎隊長、中津哲夫登攀隊長以下 11 名の東北大学カラコルム遠征隊はビラフォンド・ラを越え、7 月 12 日 B.C を建設した。

スタガール氷河の源頭にむかってキャンプをのばし、C<sub>4</sub>(6,630m) から西稜をたどって 8 月 8 日第 1 次隊、片山正文、今井順一、高橋昭平、8 月 9 日第 2 次隊、手塚重久、大平和宣、塩原匡貴、古谷信之の合計 7 名が頂上に立った。「頂上は中国側、テラム側は切れ落ち、シアチェン側は急傾斜で落ち込んでいる」永年の夢を果たした一瞬であった。

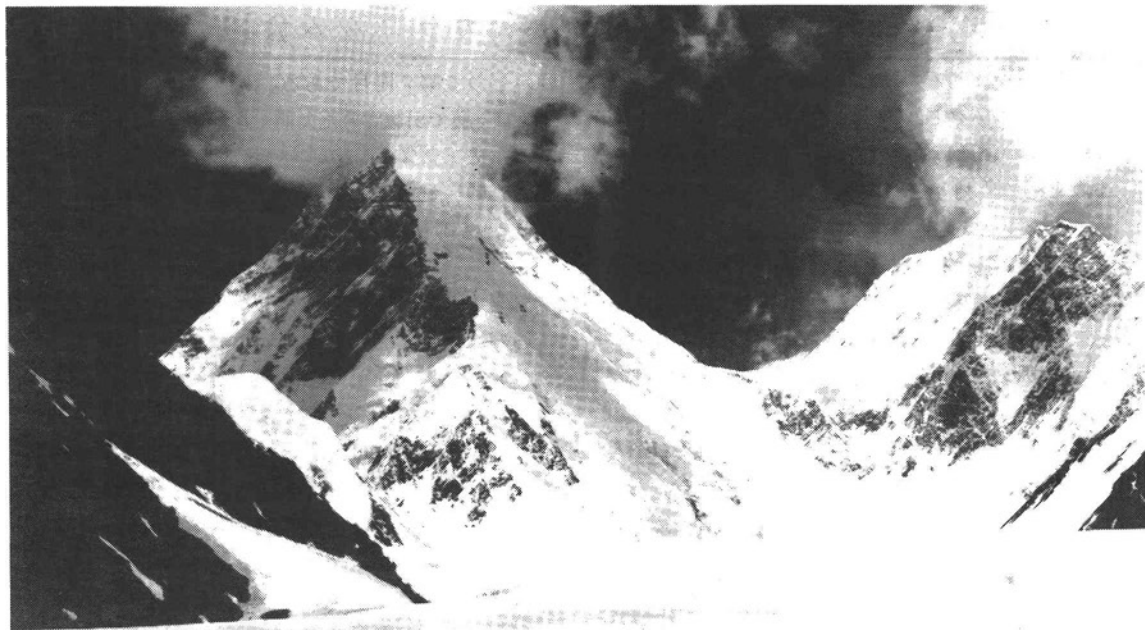
(O)

※

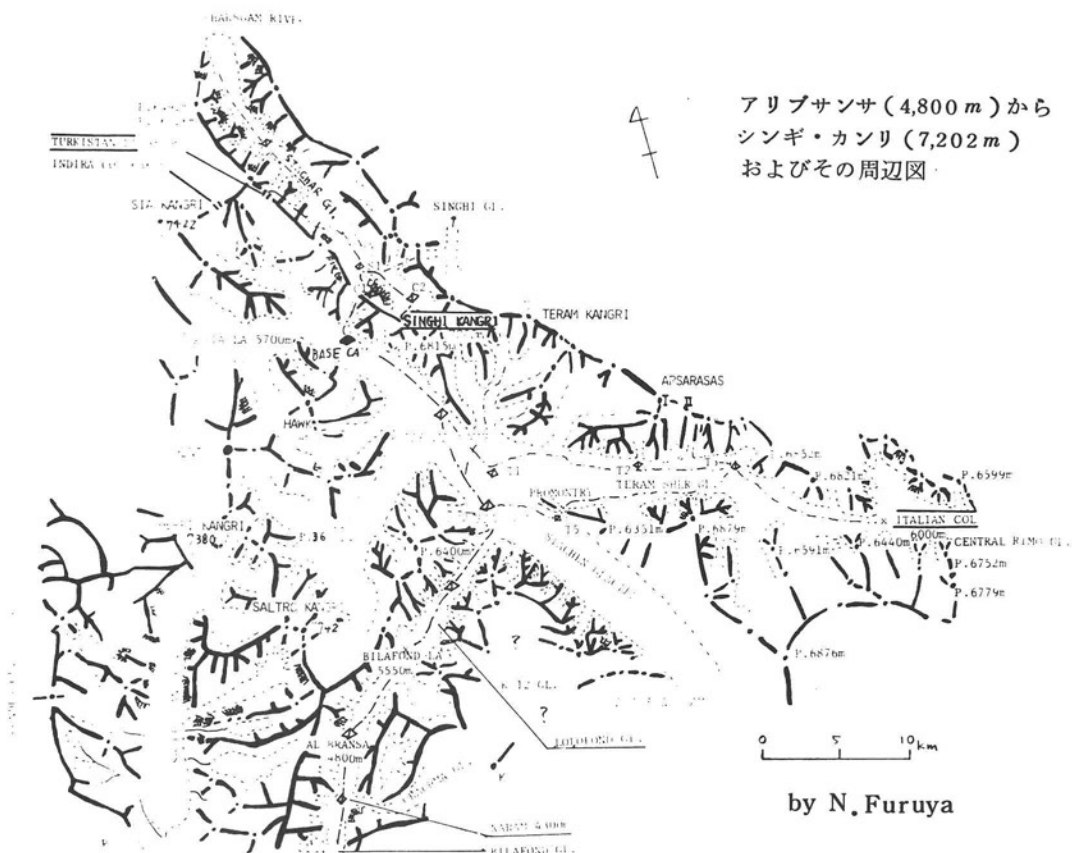
シンギ・カンリ登頂についてはすでに雑誌などに発表しているので、ここでは登頂後、踏査したスタガール氷河およびテラムシェール氷河につい

てのべる。

1976 年 8 月 8 日、9 日の両日に渡ってシンギ・カンリ峰の初登頂を果たした我々は、ポーターたちがベースキャンプに戻ってくる予定の 8 月 25 日までにまだ余裕があるので周辺の氷河を探ってみることにした。まず近くのトルキスタン・ラに偵察を出した。この峠は、インディラ・コルと並んで技術的な難しさがなく通過でき、また、歴史のある峠である。シアチェン氷河を北上した場合、シアチェン、ムスターグの山々を越えられる唯一の安全なルートである。事実、ベース・キャンプ付近でポーターが木の棒をよく使っているのを見かけたし、スタガール氷河をかなり下ったところでもたくさん木の切端を見つけた。これは探検隊が残したものか隊商のそれかはわからないが興味をおぼえた。この峠からはシア・カンリから南東にのびた稜線がよく見えたが、インディラ・コル



テラム内院氷河よりシンギ・カンリを見る



## 小チベット ラダックへ ベース料金 234,000円

〔東京・デリー・スリナガル往復、デリー宿泊料金〕

8月4日発：19日間／8月7日発：9日間／各20名

現地費用は別途(例) 9日間／3食ホテル付観光含95,000円

## エベレストでお正月を ベース料金 212,000円

〔東京・カトマンズ往復、デリー及カルカッタの乗継代含〕

12月25日発：28日間／12月26日発：14日間／12月29日発：8日間／各20名

現地費用は別途(例) 8日間／3食ホテル付観光含74,000円

以上はいずれも52年4月1日を基準にしています。現地事情その他で変更する場合もあります。

共同企画：HAJ／アドベンチャー・スポーツ(株)

## HAJ「ヒマラヤ」年間購読料(会費)納入のお願い —— (1977.4.1～1978.8.31)

HAJの活動に活力を与えるのが皆様の会費です。未納の方は封筒の表に「前金切れ」の赤字が印刷してあります。振替名古屋 21645をご利用下さい。いきちがいに納入いただいた方はお許し下さい。

なお、4月末日までに納入のない場合は納入のあるまで「ヒマラヤ」などの発送を停止いたします。

は望むことができなかった。またここからスタガール氷河に落ちている支氷河は中間にアイスフォール帯があり登下降は一見したところ難しいように見える。

氷河探索の第1日はトルキスタン・ラへの支氷河出合から1時間位下ったところにテントを張った。このスタガール氷河は長さが25m前行でカラコルムの主分水嶺以北にありヤングハズバンド以来盛んに探検が展開されたシャクガム河に出合っている。登頂後1週間続いた好天もこの日から崩れる気配が見えはじめ、南から盛んに雲が流れてきた。この地域では、中国側から風が吹いている間はよい天気が続く。だから南の方を見ていると天気の大体の目安がつく。サルトロやK12の山々はシアチェン北岸の山々より天気が悪く真先に雲に隠される。

翌朝は雲が低くたれこめまた悪天の周期に入ったため降雪が予想されたのでパーティを分け小人数でスピーディにこの先の部分を探ることにした。

左岸のモレーン沿いに下っていくと氷河は次第に起伏が大きくなりさらに下流域では錯綜した真白い巨大な氷塔の連続となる。この光景はメイスンの「ヒマラヤ」のキャガール氷河の写真によく

似ている。一般にカラコルム北面の氷河は荒れているようである。しかし、都合の良いことにモレーンはクレバスも少なく順調に下ることができた。ところが出合2km位上流高度約4,670m付近でモレーンが川で切れ、大きく高巻きしないと進めなくなった。時計は13時を指し、にわか雨も降ってきたので戻ることにした。ここから出合を眺めるとシャクスガムのゆったりとした大きな流れが見え、その北側には広い砂礫河原が広がっていた。このことからこの氷河は出合で終わっており、川を埋めてさらに流下しているようには思えなかった。またこの氷河からウルドック氷河に越えられる峠も見出せなかった。

8月23日ベース・キャンプを発ちテラムシェールを目指し、シアチェン左岸のモレーン沿いに下る。テラムシェール氷河出合付近は、この氷河が180度近く方向転換しているし、氷河も大きいだけあって、いくつものモレーン帯の間には、池や川の大きいのがありテラムシェール氷河に入るのに苦労するが、この日はそのモレーンの上で泊った。アブサラサス周辺の山々は下部に花崗岩が貫入し山体の主要部分はスレートやホルンフェルスでできておりモレーンも黒っぽい無化石の岩石が



スタガール氷河上よりシンギ・カンリ(7,202m)(左)およびPeak 6,815m(右)を見る



多い。

翌日は、さらにモレーンを横断し、一度氷河上に出たが歩きにくいので、またモレーンに戻って進む。アプサラサス内院氷河出合より、しばらく進んでから氷河の起伏も少なくなってきたので、その上を行く。氷河の表面には日差しで融けた水がちょうど靴底位の大きさに到るところに溜りその中に隊員がよく落ちた。次の日は氷河の表面に今度は小突起が増えてきて登高ははかどらない。

昼過ぎにアプサラサスⅢ峰直下にテント設営した。ここからのⅢ峰は、2,000 m 近い高度差を一気に落ちているのは圧巻だった。その反対側のノーステロンの6,800 m 級の山々も正面から取付くのは難しい。1日の悪天停滞を挟んでイタリアン・コルに向う。地図では3時間でいけると踏んだが実際は9時間もかかってしまった。テラム・シェール源頭の氷河の状況とできればセントラル・リモ氷河を下りリモへの登路を捜すという計画も視界の効かぬこと相まって消し飛んでしまった。最終キャンプ(5,500 m)からしばらく進むと大きなクレバスが横断するように走っており、右に行ったり左に巻いたりして時間をくう。右岸から支氷河が出合うところを過ぎると傾斜は緩くなる。平らに見える地点を「そこだ、そこだ」と思いつつ2時間位歩いてやっと少しばかりリモ氷河側に傾斜している地点に着いた。そこがイタリア峠だった。全くだだっ広く、高度計は5,990 m を指していた。残念ながら視界は良くなく、リモ氷河源頭の山々を良く見ることはできなかったが、一瞬見えたカラコルム峠方面は中央アジアのおだやかな山容をしていた。

ところで、「カラコルム登山史」ダイネツリ著あかね書房刊の327頁の写真解説は誤りでテラムシェール氷河上からはるかにシアチェン氷河が写っている写真である。したがってこれは、イタリアン・コルに向ってテラムシェール氷河を上流に向っていることになる。今日の行動は14時間余りの激しいアルバイトであった。翌日は左岸のモレーン沿いにテラムシェールを下ったが、氷河上を歩くより余程早くプロモントリーに着いた。

ここは大きな池がありまた草花が咲き乱れている。氷河に囲まれているところだとは到底思えない地上の楽園だ。久しぶりに土の感触を味わうが実に暖みがあり土の有難さを知った。しかし、地

質学的な尺度でみるとここは氷河によって削られいずれは消える運命にあるのだろう。

次の日はシアチェン氷河の横断だがアフタヌン・クラッドでなかなか横断はできず、まる1日かかった。シアチェンキャンプにはすでに懐しのポーターたちがきており、一緒にチャパティをむさぼり食った。

文献：「シンギ・カンリ登山報告書——カラコルムの処女峰登頂——1976」同隊発行、昭和52年1月31日 非売品

#### 研究会だより①

ヒマラヤ地図研究会

第1回会合を京都の事務局で2月24日開催し今後の方針を検討。初会合を祝ってビールで乾杯。

第2回会合4月2日、HAJ東京事務局で開催し「ヒマラヤ地図帖」について打合せ。

1977年の目標の主なものは①地図情報 ②カタログ作成(公刊された地図の解説目録) ③ヒマラヤ地図帖(学研版)インド編担当作成 ④中央アジア、チベット、ヒマラヤの50万図の地図帖作成。

#### 研究会だより②

Expedition 研究会

1978年カラコルム～1981年カンチェンジュンガ遠征を企画・推進中——1977年度会員募集

HAJの専門研究会の一つであるExpedition 研究グループ(略称 Exp 研)はこれまでに1974年ラムジュン・ヒマール(6,963 m)、1975年ヌン(7,135 m)、ガルワール(リシ・パハール 6,992 m)他)遠征母体となり、それぞれ成果をあげてきました。

現在、1978年カラコルム(ユクシン・ガルダン・サール 7,600 m)に始まり、カンチェンジュン第1次遠征隊、1981年カンチェンジュンガ本隊など一連の遠征を企画し、準備に入っております。Exp 研は常に新しいメンバーを求め、前進的な遠征の実現に向けて研究を進め、それを実践して行くグループです。ヒマラヤ登山、遠征(Expedition)に興味があり、これからの遠征に参画してみようとする方の入会を歓迎します。申込は5月20日迄に事務局へ。年会費はHAJ会費のほか5,000円です。

## ◇◇◇◇ パキスタンの旅について ◇◇◇◇

\*\*\*\*\* 大 木 滝次郎

登山のことは文献を参照していただくとして、ここではパキスタンの旅行事情について説明しておく。

### (1) 入国について

査証：パキスタンは日本人はビザが不要という有難い国である。空路でパキスタンに到着すると空港で一カ月間有効の滞在許可証が交付される。陸路の場合は、現在、インド側・フェルツェホール、パキスタン側・ワグハの1カ所しか入城できないが、ここでも同様にビザ不要で入国できる。

1カ月以上滞在の場合は情報警察局(Super Intendant Police)へ出向き、外国人登録許可(Certificate of Registration)を入手すれば3カ月まで滞在できる。3カ月以上の場合は特別の理由があり、当局で認めた場合に限り許可されるが、かなりむづかしい。この事情はときどき変更になるので、パキスタンに入国したら早目に観光局で確認しておくとうい。事前に下記に聞くのもよい。

在日パキスタン大使館

〒105 東京都港区芝3-1-15 小林ビル

(午前9時30分～17時30分)(土、日は休み)

### (2) 交通 国際線はヨーロッパ行南まわりルートの航空会社のほとんどがカラチに寄港する。デリー—ラホール間もアフガン航空とインド国内航空(IAC)が週に3便ほどとんでいる。

自動車はアフガニスタンのカブールからペシャワールへ定期バスがある。デリーからラホールへの不定期バスもときどきある。汽車はアムリツァールからラホールに1日1便通じている。

パキスタン国内は道路事情もよく、車も性能のよいのが走っている。奥地ではジープが活躍している。料金については別項「アフガニスタンの旅について」とほぼ同様であると考えてよい。

### (3) 旅行許可範囲：1973年6月から山岳国境の約16kmまで旅行ができることになった。いわゆるトレッキングが可能である。ただし、パキスタンでトレッキングをする場合は登山隊と同じような許可が必要であり、リエゾンオフィサーもついてくる。従って奥地への山旅などは「ツーリスト」として行動する方がめんどうがなくてよいであろう。奥地の事情などは観光局(Pakistan Tourism Development Corporation, PTDCと略)に聞いてみるのもよい。

### (4) 観光地など：

街で見ごたえのあるのは東のラホール、西のペシャワールであろう。ラホールは樹木も多い美しい街で、イスラムの雄大な建築物も多い。バドシャヒ寺院、ジャリマール庭園、ジェハンジルの墓などが知られている。貨幣の蒐集で知られる中央博物館も見逃せない。

ペシャワールは東西交通路として古くからさかえたところで、今でもバザールでは金銀細工をはじめ、中央アジアやシルクロードのにおいがする品物が売買されている。カイバル峠も西18kmにある。

ラワルピンディの西17kmにある、タクシラの遺跡は紀元前5世紀のアレキサンダー大王遠征の頃の都市の跡で、付近からはガンダーラ派の仏像が出土する。

山好きの人にはスワート、チトラル、フンザといったところであろう。

スワートはペシャワールから車で5時間ほどで、ファラクサールの山群とアプリコットで有名。チトラルはラワルピンディから車(2日間)または飛行機で行ける。ティリチミールが見られる。フンザはギルギットまで飛行機、そこからジープで1日かかる。不老長寿の国として有名。ラカボシの眺めもよい。ギルギットやスカルドを起点にしてのカラコルムの山旅は困難なことも多いが得ることも多い旅となろう。

### (5) 文献：「ネパール、パキスタン、ヒマラヤ・トレッキング」 実業之日本社 1,380円

「中央アジア・シルクロード」 日本ヒマラヤ協会 1,600円

## ◇◇◇◇◇◇◇◇ アフガニスタンの旅について ◇◇◇◇◇◇◇◇

\*\*\*\*\* 鈴木康志

昨年のHAJアフガニスタン遠征隊により、アフガニスタンの新しい情報が入りました。また、先日、アフガン観光公社(AFGHAN TOURIST ORGANIZATION)より、1977年のアフガニスタンにおける観光についての情報が寄せられましたので一般の観光事情をここでは主として紹介します。

### (1) 入国について

査証：(観光査証) 交付日より、3カ月以内に入国し国内滞在1カ月の有効期限がある。空路入国者は、空港において、2日間の観光査証を取ることもできる。観光査証は旅行業社による代理申請も可能である。(手数料3,000円位)

(入国査証) で入国した場合、1週間以上の滞在には、「滞在査証」をカブールで取得し、出国の際には滞在日数に関係なく「出国査証」を取得する必要がある。

一般旅行者は、なるべくなら「観光査証」で入国した方が良い。特に出国日が休日(休日は金曜日、半休は木曜日)にかかる場合は、「出国査証」を取得できないので注意を要する。なお、空港出国者は、空港税200AFを支払うこと。詳細は、在日アフガニスタン大使館へ問い合わせして下さい。

### (2) 交通：(航空機) 国際線は、アリアナアフガン航空(FG)、インド航空(AI)、パキスタン航空(PK)、アエロ・フロート(SU)、イラン航空(IR)が乗り入れている。

(車) 一般観光のために、車を手配する場合は、現地でアフガン観光公社(A.T.O)に依頼するとよい。私的なタクシーもある。ホテルで手配してもらえる。

### (3) 気候：12月～2月 冬

一般的に晴れて乾燥している。日が暮れると温度が下がり、防寒衣などが必要である。

3月～5月 春

果樹がいっせいに花開き、一番美しい季節である。

6月～8月 夏

山間部は、快適であるが、南部と北部は暑さが厳しい。昼夜の気温の差が激しいから健康には、くれぐれも注意が必要である。

9月～11月 秋

花が美しく旅行には最適である。

### (4) 予防接種：天然痘、コレラは絶対必要。他に腸チフス、急性肝炎なども考慮の要がある。

### (5) ガブール市(KABUL)

数多くの遺跡があり、ある程度の歴史を知っていないと興味は半減する。

王宮(Ag・PALACE GATES)、パールの庭園(Emperor Baburs Gardens)

ムガル帝パールが作ったもので名高いものである。彼の墓や一族の墓もここにある。

カブール博物館にはシルクロードを通して各地から集められた品物があり興味深い。観光費は  
半日観光/3時間 1～2人 14ドル(自家用1台)。グループ 12～16人(バス)3ドル。

1日観光/6時間 1～2人 28ドル(自家用1台)。グループ 12～16人(バス)6ドル。

### (6) カブール郊外

カルカ湖(Kargha LAKE)：夏の保養地として有名である。カブールより1.5時間。水泳、ボート、釣、水上スキーなどが楽しめる。

パグマン(Paghman)：カブールより3時間。アフガニスタンの田舎を味わえる。自然が美しいところである。上記両地を結んで。カブールより半日観光が、可能である。

サラン峠(Salang Pass)：ヒンズークシュ山脈の中央部にある。サラン・トンネルは長さ2,676 m、標高は3,500 mである。カブールより1日観光で1~2/人 48ドル(自家用1台)。

カプルより、パーミヤンへは2つの道がある。一つはハジガク峠(Hajigak Pass)標高(3,700m)経由。他1つは、シバル峠(Shibar Pass)標高(3,285m)経由がある。前者の所要時間は、7時間。後者は6.5時間要する。飛行機(バクトル航空)があるが、余裕ある人には、陸路をお勧めする。ハジガク峠経由のこの道は、アジア・ハイウェイの一部であるので、近い将来には舗装されることと思う。

仏像の対岸には、ジャリ・ゴルゴラがある。ジンギスカンが係を失ったため、生き物は、すべて、子供、鳥、動物、草木に至るまで殺した。別名「悲鳴の丘」または「叫びの丘」と呼ばれている。カブールより2日間観光 1～2人 100ドル(自家用1台)。

バーミヤンより75km、約2.5時間である。砂漠地帯に、濃紺の水をたたえた湖である。ここを訪れたらぜひ1泊をお勧めしたい。宿泊施設は整っていないが、キャンプも可能である。御来光がとても素晴らしい。カブールよりバーミヤン/パンデ・アミールへ3日間観光で、1~2人 140ドル(自家用1台)。グループ 12~16人(バス) 25ドル。

昨年、1976HAJ・Exp によって、この地方の状況が詳しく報告されている。(報告書「パダクシヤンからヌーリスタンへ」参照 HAJにあり 2,200円) A.T.Oでもこの地方にセット旅行を企画している。カブールより、ジャララバード(Jalalabad)、アサダバード(Asadabad)カムー(Kamu)、カムデシ(Kamdesch)まである。以前はこの地域への旅は困難を極めたものであったが、最近になって車の通れる道路がヌーリスタン地方の西端を通るようになった。入域には、特別許可が必要であるのでなるべく早くA.T.Oに連絡すべきである。4日間観光 1～2人 360ドル(自家用1台)。グループ 12～16人(バス) 43ドル。

“ AFGHAN TOURIST ORGANIZATION ”

木曜日 午前9時～午後4時 金曜日と休日 午後9時～12時まで。

- 18 -



◆◆◆◆ イタリア隊によるカラコルム遠征文献 ◆◆◆◆

水 野 勉

この前「深田久弥旧蔵書目録」のことを書いたとき、「イタリア語関係は大分これに加える必要がある」と述べたが、これには注が要るかもしれない。イタリア語文献がその目録に不足しているというだけのことでなく、イタリア隊によるカラコルムの探検および登山は、めざましいものがあり、ヒマラヤ探検・登山史上見逃すわけにはいかないからである。さらに、かれらの業績はりっぱな報告書として発行されており、その一部は英語に翻訳されているが、大部分はイタリア語文献なのである。また、たとえ英語の翻訳があっても、例えば、アブルッジ公のカラコルム遠征およびフィリッピのカラコルム学術探検などは、やはり原書がほしいものである。前者の報告書などは英訳は大分日本にきていて持っている人も多いと思うが、イタリア語の原書はどれだけ日本にきているのだろうか。ぼくの狭い知見の範囲では、一冊も見当らない。戦前の日本山岳会ルームには所在していたようであるが、戦災で失って以来、入手されていない。

しかし、それ以外にもカラコルムのイタリア語の重要文献はかなりある。ずっと以前に、この欄で紹介したピアセンツァのモニュメンタルな著書“Nel Himalaia Cashmirano 1930”もカラコルムをはずれるが(ヌン・クン遠征)、忘れることはできない。フィリッピの遠征に地質学者として加わったダイネリは、正式報告や学術報告以外に、個人紀行として大部な本を書いている。“Paesie genti dei Caracorum. Vita di Carovana nel Tibet Occidentale 2 vols. 1924”がそれである。この本こそ日本に何冊あるか疑問である。それ程、珍しい本ではないはずであるが、イタリア語ということで求める人が少ないのであろう。また、ダイネリはその後1930年に東カラコルムを訪れ、その紀行も出版しているが、これは英訳されているので読まれた方もあろうと思う。これは1933年に“Buddhists and Glaciers of Western Tibet”としてロンドンから発行されている。しかし、この原本である“il Mio Viaggio nel Tibet occidentale 1932”は、ぼく自身みたこともない。英訳本が304ページであるのに原本は403ページ

となっているから、はるかに堂々たる本であろう。

だいたい、イタリア隊の報告書は堂々たるものが多い。戦後の“Kanjut Sar”であれ、マライニの“Gasherbrum 4”といい、“Paropamiso”といい、りっぱな本である。アブルッジ公やデ・フィッピの本、スポレト公の報告など、戦前のものはダイネリの本と共に、大型で写真も多く、地図を付録とした、堂々たるものである。ここでは、スポレト公の報告書を紹介しよう。スポレト公のカラコルム遠征は1929年におこなわれた。目的はバルトロ氷河源頭の探検およびジャクスガム川中流の地図の空白部の探検、実体写真測量によるバルトロ氷河のできるだけ広汎にわたる測量、この地方の地質調査の拡大などあった。アブルッジ公やデ・フィリッピ遠征の伝統をつく壮大な遠征であった。

当然のこととして、この報告書も堂々たる本となって発行された。“La Spedizione Geografica Italiana al Karakoram — Storia del Viaggio e Risultati Geografici 1936”がそれである。本文568ページ、附録51ページで、4<sup>0</sup>版で写真の豊富な本である。しかも、これには地図を集めた別巻が付いているという豪華さである。この本も日本ではあまりみられないのは残念である。おもしろいことには、この本の発行形式が変わっている。この本は4種類ある。第1は50部、第2部は500部、第3は2,200部、第4は普通本である。要するに、3種類の限定本と普通本ということである。ぼくの持っているのはもちろん普通本であるので、限定本の豪華さなどは知る由もなく、ただ想像するだけであるが、第1の50部本は表紙は革装、革装の箱入り、特殊な用紙使用とある。500部本は羊皮紙製で、上質な用紙使用とある。第3の2,200部本は表紙がジュート織り装で、純白の用紙を使用している。たくさん発行されたと思われる(それでも2,300ぐらいと思う)普通本ですら、日本にはあまりきていないのに、限定本はどうであろうか。一度でいいから見たいものである。

それにしても、こうしてみると、他のイタリア隊の報告書でもりっぱな限定本が発行されている可能性がある。イタリア語が日本ではなじみがないので、到来が少ないのはじつに残念である。

# 第7回東日本・ヒマラヤ研究開催要項

場所：秋田市 期間：1977年6月25日(土)～26日(日)

**会場** (会議・宿泊)「協同社大町ビル」秋田市大町3丁目

**主催** 日本ヒマラヤ協会(HAJ) **後援** 秋田県山岳連盟/エア・インディア

開催の趣旨 かつて登山家や探検家の“夢”の一つであったヒマラヤやシルク・ロードは、現在、いわゆる“大衆化”の波にあらわれ、多くの人たちが訪れるようになりました。それにともない、登山、トレッキング、学術調査など、多彩な“ヒマラヤ”で代表される中央アジアをとりまく各地への接し方が見られます。HAJはこれらの地が好きであるということを通項として、さまざまな人が結集した組織であり、そこには百人百様の“ヒマラヤ”が存在しています。本年は、ヒマラヤを種々の角度から知り、その深さと幅を再認識しようということで、「ヒマラヤへのかかわり方」をメイン・テーマに掲げて研究会を行うことにしました。なお、今回でこの研究会は終り、次回からは別の形で再スタートの予定です。

この研究会には特に参加資格というものはありません。“ヒマラヤ”に関心を持つ人であれば、どんなでも参加を歓迎します。本年の会場の秋田市はちょっと不便なところですが、多くの方々が参加されることを期待します。初夏の秋田の山や街、そして、銘酒や“おぼこ”もお待ちしております。

**日程** 第1日目 6月25日(土) (受付 9:00) (開会 10:00)

◇1976～77年のヒマラヤ(インド・ヒマラヤを主体として/新登山規則の解説など) 10:15～11:00

◇ヒマラヤへのかかわり方(日本人とヒマラヤ/探検とヒマラヤ/学術の目から/ヒマラヤの花と蝶/ヒマラヤの動物……など) 11:00～16:50(昼食・休憩を含む)

◇＜パネル討議＞ ヒマラヤの可能性を探る 16:50～18:50

◇ディナー・パーティ (全国からの参加者が大いに語り合う機会です) 19:00～21:00

◇地域別情報交換会(物価、交通事情、キャラバン事情などなど、~~⑩~~情報も) 21:00～22:30

①アフガニスタン ②パキスタン ③インド ④ネパール ⑤パミールとシルクロード など

第2日目 6月26日(日) (朝食 7:30～8:30 後、開会)

◇地域別情報交換会報告(第1日目の各地域事情の概要を報告します) 8:30～9:30

◇＜パネル討議＞ 遠征組織論 (よいエクスペディションを実行するには……) 9:30～11:30

◇ヒマラヤとシルク・ロードを駆ける——HAJ H&Sプランについて 11:30～12:00

◇記念撮影後、閉会 12:00～12:15

**参加費** 8,000円(1泊3食、資料代、会議費、パーティ会費などを含む。当日、申込金2,000円を差し引いた残額6,000円を受付で納入して下さい)

**人員** 70名 (申込順で定員に達したらメ切ます)

**申込み方法** 昭和52年5月24日(厳守)までに下記研究会事務局へ申込金(2,000円)をそえてお申込み下さい。

参加申込の方はハガキに「氏名、住所、電話、到着予定日時、地域別情報交換会出席予定地域名、海外経歴と海外計画(年・地域・目的)、トレッキング・セミナーへの出欠、頒価、前夜行事への出欠(出席の場合、6月24日の宿泊と夕食の要・不要、その他事務局への要望)」を記入してお送り下さい。

**送金方法**

**その他** ①当日、会場で資料の有料頒布を希望される方がありましたら、資料名、頒価を事務局へ。  
②前日(6月24日)の宿泊を希望される方は4,000円(1泊2食)で宿舍のあっせんをします。  
③研究会への中途参加、中途退場は原則としてお断りいたします。やむを得ない場合はあ

らかじめ事務局へ知らせて下さい。ただし、参加費は全額いただきます。

④講師、パネラーなどについては追って参加者申込者にお知らせいたします。

⑤本研究会に関する一切の問合せは研究会事務局（福田文二）宛にお願いします。

× × × × ×

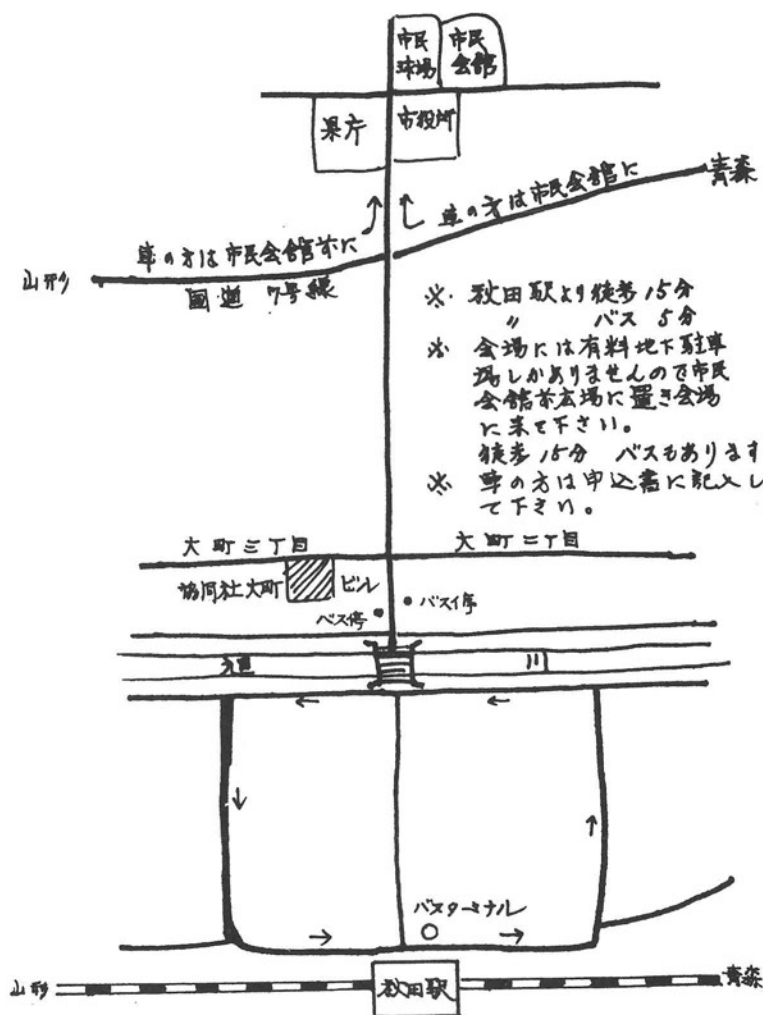
**トレッキング・セミナー** 研究会終了後、15時まで同会場で開催しますので計画をお持ちの方、関心のある方はご参加下さい。経験者がアドバイスします。（自由参加）

**前夜行事** 6月24日(金) 同一会場「協同社大町ビル」で下記のように行います。

ヒマラヤ映画会 「未踏の氷壁」他 18:30~20:00 入場料300円（研究会参加者は無料）

（ネパールのジュガル・ヒマラヤ登山の記録／シネスコ・カラー）

HAJ専門研究会小集会（Exp研、ラダック研、チベット研、東ヒマラヤ研 他）20:00~23:00



予告

「ヒマラヤの彼方へ」講演と映画の会

インド・ヒマラヤの第一人者である J. シン氏  
(エア・インタ、登山・トレッキング部長)をむかえ  
え、水野勉氏(中央アジア研究家)の講演もお願いし、  
下記のような日程(案)で講演と映画の会を開催します。  
多くの皆様の参加をお願いします。

主要内容

講演 「インド・ヒマラヤの魅力」 J. シン氏  
(資料配布・通訳つき)

講演 「シルクロードの山と人」 水野 勉氏  
(東京・小山・郡山のみ)

映画 シルクロードまたはヒマラヤの映画

入場料 大人500円 小人(中学生以下)300円(予定)

入場券は各地区責任者を通じて購入して下さい。  
HAJ名古屋に代金をそえてお申し込みいただければ  
郵送します。2,000円までは切手で結構です。  
入場券の送料はHAJで負担します。

日程 (A) 講演と映画の会

- 7月24日(日) 17時00～19時30 「名銀ホール」
- 7月25日(月) 18時00～20時30「清芳幼稚園大ホール」
- 7月26日(火) 18時00～20時30「郡山市公会堂」
- 7月27日(水) 18時00～20時30「八戸商工会館」
- 7月30日(土) 14時00～16時30「帯広市勤労者福祉センター」
- 7月31日(金) 18時00～20時30「旭川市民文化会館」
- 8月1日(月) 18時00～20時30「北海道新聞社ホール」
- 8月3日(水) 18時00～20時30「日本交通協会  
大会議室」

(B) 北海道花と山の旅

7月28～8月1日まで上記日程を追って北海道  
中央部を車で旅します。

◇7月28日 苫小牧(2h/68km)→新冠ユートピア牧

場(武田牧場長より名馬“ハイセーコー”の話を聞く)  
夜は牧場産の羊肉バーベキューの食べ放題。

宿泊:ユートピア・ロッジ

◇7月29日 新冠(3h/130km)→様似町→アボイ岳  
登山(登り3時間、下り2時間)→アボイ山麓

アボイ岳 日高山脈のいちばん南にあるこの山(810.6  
m)は海霧の影響をうけるので気温が低く、高山植  
物のお花畑が美しく、珍しい種類も多い。頂上か  
らはきびしい山容の南日高の山なみが遠望され、ま  
た、美しい海岸線も望まれる。

◇7月30日 アボイ山麓(1h/29km)→エリモ岬(4h  
/132km)→帯広(集会後)→(1.5h/50km)糠平

エリモ岬から帯広へ 北海道南端にあるエリモ岬は、  
なだらかな丘陵がするどく海に没し、黒潮と大地の  
接点となっている。ここから黄金道路を走り、車窓  
から入る波しぶきをあび帯広へむかう。帯広から大  
雪山山中にあるウベベ山の見人湖のほとり、糠平  
温泉に到着する。

◇7月31日 大雪高原→大雪ダム→層雲峡→(ロー  
プウェイで黒岳往復)(3h/90km)→旭川

◇8月1日 旭川→十勝岳の望岳台→吹上温泉→十  
勝岳温泉(5h/230km)→札幌

札幌 北大クラーク会館で昼食後、北大低温研究所  
を見学(映画と説明)。北大構内、植物園など見学。  
18時からは北大教授の特別講演を含んだヒマラヤ集  
会を開催。終了後、有志でサッポロビール園でジン  
ギスカン料理と生ビールの飲み放題で北海道最後の  
夜を楽しみます。8月2日は自由参加。

費用 実費をいただきますが、交通費、宿泊費、食  
費、観光費を含めて1日当り大人7,000円、子供  
5,000円位を考えておいて下さい。

(C) 洋上ヒマラヤセミナー

なお、上記の日程に合せて下記のフェリーによる  
「洋上ヒマラヤセミナー」を開きます。

7月27日 八戸港発22時00→苫小牧着28日09時30  
(東日本フェリー) 合流  
7月26日 名古屋港発18時30→仙台着27日18時00  
→苫小牧着28日10時45 流  
(太平洋沿岸フェリー)

③と④を組合わせた北海道の山旅とヒマラヤ洋上  
セミナー(札幌で解散)に関する費用は実費をいた  
だきます。フェリー、宿泊などの手配は事務局でお  
こなします。これに参加希望の方は4月末日までに  
HAJ名古屋事務所へお問合せ下さい。



## 〰〰 AIUのトレッキング用海外旅行保険 〰〰

この保険は、トレッキングをふくむ旅行期間中のケガや病気による医療費、死亡金をお支払いいたします。ただし、ザイル、ピッケル、アイゼンなどを使用する登山行動中の事故はカバーいたしません。

保険料はタイプおよび期間で決ります。3タイプのうち1タイプをお選び下さい。申込書の「旅行目的」の欄に「Trekking」とタイプ名(A、B、C)をお書き下さい。申込書はHAJ名古屋事務所にありますので、出発前1ヵ月以前にお問合せ下さい。

| 保 障 の 内 容 |         | Aタイプ  | Bタイプ    | Cタイプ    |
|-----------|---------|-------|---------|---------|
| 傷 害       | 死亡・後遺障害 | 500万円 | 1,000万円 | 2,000万円 |
|           | 傷害治療実費  | 200万円 | 250万円   | 300万円   |
| 疾 病       | 疾病治療実費  | 200万円 | 250万円   | 300万円   |
|           | 疾 病 死 亡 | 500万円 | 500万円   | 500万円   |

なお、保険期間の数え方としては、初日は算入しません。たとえば11月10日から11月24日までの旅行ですと、保険期間は14日間。また、普通の観光などを目的とした海外旅行のための保険も扱っています。保険料は上記の約1/3になっています。

| 保 険 料 金   |         |         |         |
|-----------|---------|---------|---------|
| 保 険 期 間   | Aタイプ    | Bタイプ    | Cタイプ    |
| 8日～10日間迄  | 12,150円 | 18,910円 | 30,760円 |
| 11日～14日間迄 | 12,650円 | 19,610円 | 31,760円 |
| 15日～17日間迄 | 12,960円 | 20,020円 | 32,320円 |
| 18日～21日間迄 | 13,510円 | 20,820円 | 33,520円 |
| 22日～24日間迄 | 13,920円 | 21,330円 | 34,180円 |
| 25日～27日間迄 | 14,490円 | 22,160円 | 35,410円 |
| 28日～1ヵ月間迄 | 14,740円 | 22,510円 | 35,910円 |

インド大陸、中近東方面へ当社独自のプランをいたしております

### ツアー名

- ★シルクロード 6,000キロ
- ★ネパールとアフガニスタン
- ★砂漠の国アフガニスタンと最後の桃源境フンザ
- ★大ペルシャとアフガニスタン

——お問い合わせは下記まで—— 一般登録 372号

### (株)トラベル ジャパン

〒100 東京都千代田区有楽町2-2-1  
ラクチョウビル5F 電話 (03) 572-1461  
担 当——— 外池・小島・丹羽・藤本

## 海外登山，トレッキングに傷害保険を

——海外旅行傷害保険(運動危険担保特約付)について研究しております——

タケ

岳

産

業

にご相談して下さい。／

すべての保険を取扱い 安心と笑顔 を売る 岳産業 の西田までご連絡下さい

自動車・火災・レジャー(山岳保険・国内旅行・つり・ゴルフ・ヨット)・普通傷害・利益・生産物等の私達の生活に関連した保険を取扱っています。

大正海上火災 <sup>タケ</sup>  
保険(株)代理店 岳 産業

大阪市淀川区西中島町5丁目第3チサン10F 6号  
TEL 06(304)1115 番 〒532 西田繁造  
●地下鉄西中島南方駅または国鉄新大阪駅下車徒歩5分

# 大自然の神秘と雄々しさ、 ガッツなトレッキング——ヒマラヤ

東はブータン・シッキムから、西はガルワール・ラダック、そしてカシミールへと三千キロ。実に、ヨーロッパ・アルプスの二倍です。雄大な八千メートル級の巨峰の連なるヒマラヤを自分の足で踏みしめ、自分の肌で感じるワイルドなトレッキングは、どのレジャーも及ばないスケールの大きさと心の安らぎを与えます。

## ノ・公害

時間に追われ、人間関係のわずらわしさに悩み、たまには仕事から逃げ出したいと思っている都会のビジネスマン達。彼らにこのヒマラヤ山麓の魅力を教えてあげてください。8000m級の巨峰が連なる大自然の景観。斜面を華やかに色どる花崗の美しさ。海拔4865m、常に雪塊や氷塊をたたえているアルハルウツ湖の神秘的な静けさ。すべてが彼らの求めている超現実的な世界です。

## シッキム

ごく最近まで鎖国状態であったシッキムへ入境することができるようになりました。観光客のほとんどない現代の「桃源境」とはこのことです。王宮を中心に神秘的な国が、静かなたたずまいを見せています。ダーズリンからの途中にあるカリンボンの町も、長期滞在に向いた静かなるでしよう。買物も楽しい思い出になるでしょう。

## ダーズリン

ヒマラヤのリゾートタウン「ダーズリン」は海拔2134mの高地にあり、インドの上流階級や外国人たちの別荘も多く、健康的な雰囲気にあふれた街。このダーズリンの南東わずか11キロの地点にあるタイガ・ヒルから望むカンチエンジュンガ（世界第3位）やエベレストの偉観は、文字通り世界最高のもの。見る人の心に衝動にも近い感動を与えずにはおきません。

## ガルワール・トレッキング

ガルワール地区は、デリーの北東約400キロの地点にあり、1974年7月から外国人に解禁されました。ナンダデビー（7816m）や、ガンジス川の源流近くにあるヒンズー教の聖地をたずねるトレッキングや、高山植物の宝庫「花の谷」や4000mをこす山岳湖への旅が楽しめます。



世界の35都市をネットする——

## エア・インディア

東京●千代田区有楽町日比谷パークビル100 ☎03-367-1189  
大阪●東区備後町松豊ビル541 ☎264-1781  
名古屋●中村区堀内町ホテルニューナゴヤ ☎450-583-0747  
神戸●葦合区布引2-1-3 新布引ビル ☎(078)222-1919  
福岡●博多区博多駅前 八重洲博多駅前ビル ☎092-471-7172